

『雅言集覧』 「ろ」「は」 部における『源氏物語』 用例

平井 吾門

1. はじめに

近世辞書『雅言集覧』には、『源氏物語』の中の用例が多数挙げられている。編者・石川雅望が『源注余滴』を著すほど『源氏物語』研究に傾倒していた賜物であるが、膨大な『源氏物語』用例の中で、どのような語句が見出しとして立てられ、どのような箇所が用例として採取されているのか、といったことは従来未解明であった。

拙稿(2019)では、その解明の一端として、『雅言集覧』 「い」 部の調査をもとに『源氏物語』の用例について次のことを指摘した。

① 出現例の少ない語句は可能な限り採取している

② 初出例を探る傾向と、全巻からまんべんなく用例を採取する態度が見られる
本稿では、その傾向を全数調査によって確認する一過程として、「ろ」「は」部における『源氏物語』用例の特徴について調査したことを纏めてみたい。なお、基本的には拙稿(2019)の内容を追検証する結果となるものであり、先行研究や参考文献は同論文を参照されたい。ただし、いくつか新しい知見も得られたため、そのことは適宜示していく。

2. 調査方法

『雅言集覧』 「ろ」「は」 について、基本的にと同様に行うものである。いろは順に並んだ『雅言集覧』において、「ろ」「は」部は「い」部に続く箇所であり、特に「は」部はまとまった数のデータを取れる区切りと考えられる。具体的には、次のような手順となる。

① 『雅言集覧』 「ろ」「は」 両部から、『源氏物語』用例を全て抜き出す⁽¹⁾

② 見出し項目についてCHJ⁽²⁾上の『源氏物語』を検索し、該当箇所を確認しつつ巻名を抽出する

③ 用例数の差や初出か否かについて①②を比較

なお、「い」部でも確認したように、『雅言集覧』とCHJでは単語認定や意味区分の仕方の差異、異なる底本による本文の異同、見出し項目と用例の対応の仕方などの問題から単純な比較はできない。『源氏物語』のデータベースや索引は各種見られる中で、用例検索が簡便であり、なおかつ単語区切りや語義認定が客観視できるというメリットをふまえて、本研究ではCHJを利用しておおよその傾向を探るものである。

3. 巻の分布

3. 1 巻毎の用例数

「ろ」部は見出し項目数が26であり、ラ行音から始まる古代語の少なさを反映している。「ろ」部における『源氏物語』用例は、「ろなう、ろんぎ、ろんず／ろんずる、ろうじて、かるめろうぜらる、ろく、ろくみすくせ、ろくじのつとめ」8見出しが11巻にわたって延べ15例挙げられていた。『源氏物語』の巻ごとの用例数については、次の結果を得た。

桐壺	3	少女	1	柏木	1
賢木	2	常夏	1	橋姫	1
明石	1	行幸	1	蜻蛉	1
絵合	1	若菜上	2		

「ろ」部についてだけ眺めても、「い」部で見たように「前半の巻に偏っていない」という傾向を指摘できるが、見出し項目数がそもそも少ないため、「ろ」部の結果だけについてはこれ以上の言及を避ける。

「は」部は見出し項目数が1685あり、その中の464項目に延べ629の『源氏物語』用例が見られた。『源氏物語』の巻ごとの用例数は次の通りである。

桐壺	40	薄雲	8	横笛	4
帚木	52	朝顔	4	鈴虫	10
空蟬	14	少女	11	夕霧	18
夕顔	40	玉鬘	16	御法	2
若紫	26	初音	5	幻	6
末摘花	20	胡蝶	4	匂宮	9
紅葉賀	14	蛩	5	紅梅	6
花宴	4	常夏	5	竹河	14
葵	10	篝火	1	橋姫	17
賢木	26	野分	4	椎本	8
花散里	1	行幸	4	総角	7
須磨	22	藤袴	2	早蕨	6
明石	11	真木柱	8	宿木	11
霽標	8	梅枝	13	東屋	17
蓬生	9	藤裏葉	1	浮舟	10
関屋	3	若菜上	22	蜻蛉	8
絵合	9	若菜下	24	手習	15
松風	7	柏木	5	夢浮橋	4

一見して分かる通り、「は」部では『源氏物語』全巻にわたって用例が採取されている。ここで、前稿で「い」部を検討した際には明確なデータと比較検討することは出来なかったが、あらためて『源氏物語』の巻ごとのテキストの分量の傾向と比較する。以下、『源氏物語』から採取された用例の巻ごとの数について、「ろ」「は」両部を合計

して扱う。(3)

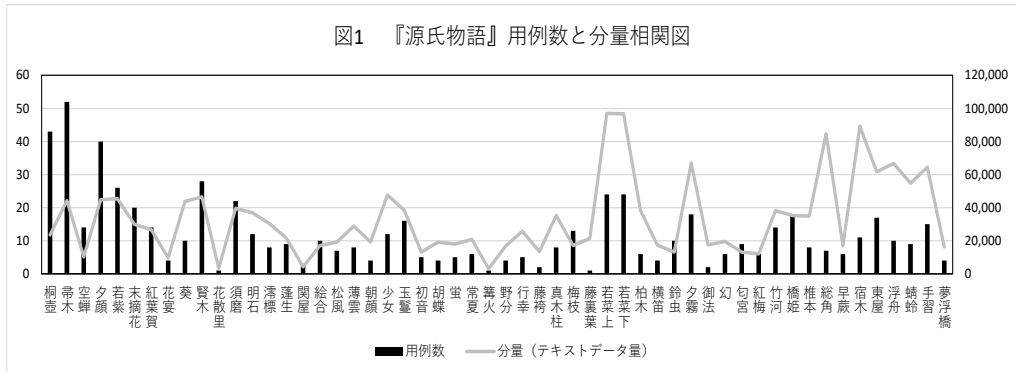


図1は、『源氏物語』の巻ごとの用例数とテキスト分量を比較したグラフである。『源氏物語』は巻ごとに大きな分量の差があることで知られており、相対的に分量の多い若菜(上・下)や総角の巻などからは用例が多く取られ、相対的に少量の花散里・関屋・篝火の巻などは用例自体が少ないことが予想される。実際に、概ね分量の多寡と『雅言集覧』が採集した用例数が相関していることは図からも指摘できる。その中で、桐壺から須磨の巻辺りまでが、テキスト分量に対して比較的用例数が多いことも分かる。この点は、初出例を挙げる傾向にあるという「い」部で見た傾向と重なるものであり、3節でさらに詳しく検討したい。

いずれにしても、テキストの分量に関わる部分とは別に、巻を意識した用例採取の様子がうかがえる。以下、「い」部での傾向を踏まえつつ、この内実をいくつかの角度から考察していく。(4)

3. 2 一致率

まず、とある見出し項目に対して『源氏物語』に見られる全ての用例の中で、『雅言集覧』がどの程度それらを採取しているのか?ということを確認する。『源氏物語』に見られる用例を全て採取している場合には、「全例採取」という特徴が指摘できる一方で、『雅言集覧』編纂時の取捨選択の様子は窺えない。その逆に、『源氏物語』に複数見られる用例の中で『雅言集覧』が全てを採取していない場合には、採取した用例の傾向を検討することが可能となるからである。

「い」部で検討したのと同様に、『源氏物語』において『雅言集覧』当該の見出し項目が何例現れるかをCHJで検索し(5)、『雅言集覧』が全ての用例を採取している項目を確認する。その結果、「ろ」「は」部合わせて472項目中175項目について全用例を採取していることが分かった。

そのうち、『源氏物語』においてただ1例見られるものを抜き出しているものが158項目(90%)であるが、「ろなう」「はひわたる」の2項目では最大の全4例が抜き出されていた。なお、CHJと『雅言集覧』と単語認定の差が出る例もあり、「はなすゝり」では、CHJが語彙素「洩啜り」で2例、「鼻」+「啜る」で1例見られ、『雅言集覧』では全て合わせて3例が示されている。(6)

『源氏物語』における用例数と、『雅言集覧』が採録する用例数をまとめると次のよ

うになる。

『源氏物語』における用例数	一致する項目数／項目数
2	12/66
3	3/52
4	2/31

この表からも分かる通り、『源氏物語』において用例が2つしか見られない項目であっても、その全てを採録していくという方針は窺えない。むしろ、何らかの方針に基づいて取捨選択されていると考えるのが妥当であろう。

3. 3 初出か否か

次に、前項で見たような『源氏物語』における全用例と一致するものではない項目について、「『源氏物語』における初出例か否か」という観点で絞り込んでみたい。これも「い」部での考察と同様である。

『源氏物語』の全用例数と一致しなかった項目は、本文の異同などで比較できない項目を除くと267見つかる。このうち、143項目(53%)において初出例を取り上げている。初出例だけの分布を見ると次の通りである。

桐壺	23	薄雲	4	横笛	0
帚木	26	朝顔	0	鈴虫	1
空蟬	3	少女	3	夕霧	1
夕顔	15	玉鬘	1	御法	0
若紫	11	初音	0	幻	0
未摘花	1	胡蝶	1	匂宮	0
紅葉賀	4	蛩	2	紅梅	1
花宴	2	常夏	0	竹河	1
葵	6	篝火	0	橋姫	2
賢木	9	野分	0	椎本	0
花散里	0	行幸	0	総角	0
須磨	4	藤袴	0	早蕨	0
明石	2	真木柱	1	宿木	0
霽標	5	梅枝	4	東屋	0
蓬生	1	藤裏葉	1	浮舟	1
関屋	1	若菜上	1	蜻蛉	0
絵合	1	若菜下	4	手習	0
松風	0	柏木	0	夢浮橋	0

当然のことながら、初出例は最初の方の巻に多く現れている。『源氏物語』において4例以上の用例が見られる項目が78あることを考えても、複数用例があるときに初出

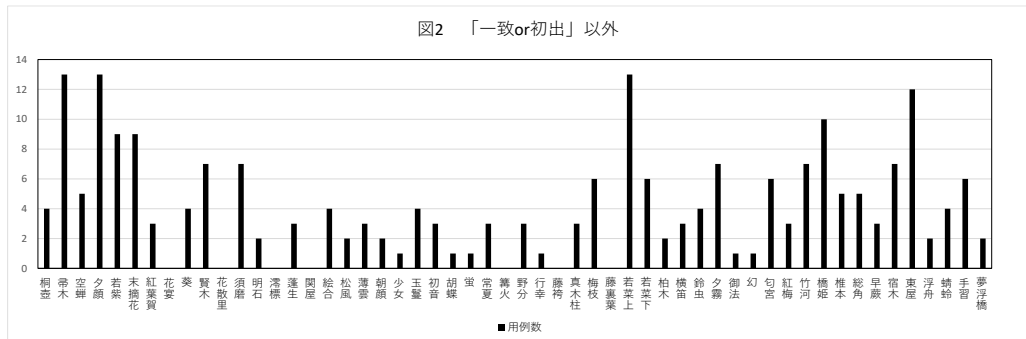
例を探る傾向があるということは指摘できよう。

3. 4 一致するもの等を除いた分布

続いて、『源氏物語』の全用例と一致せず、初出例でもないものについて考察する。『雅言集覧』「ろ」「は」部においてその条件を満たすものは、巻ごとに見れば次の分布を得る。

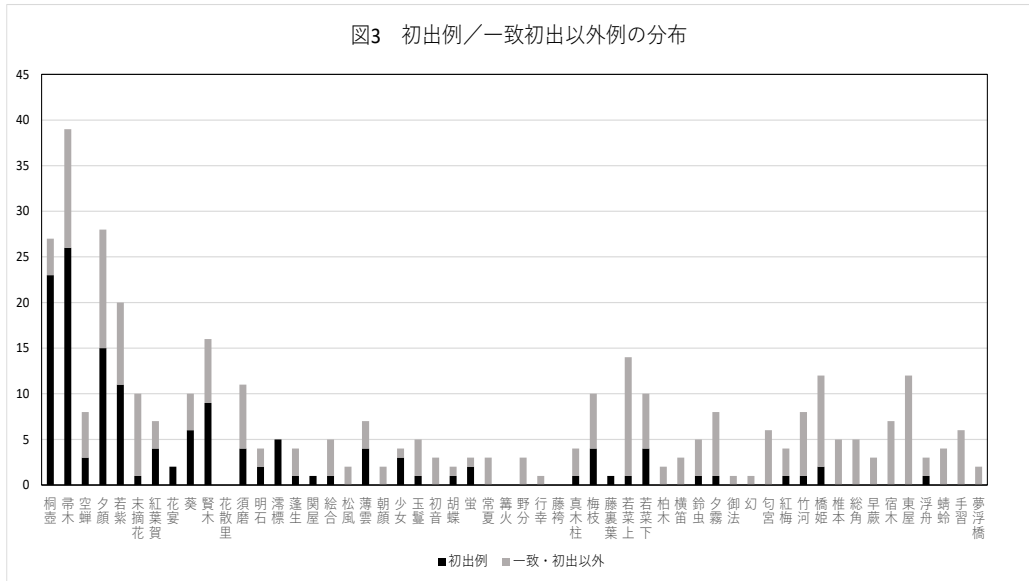
桐壺	4	薄雲	3	横笛	3
帚木	13	朝顔	2	鈴虫	4
空蟬	5	少女	1	夕霧	7
夕顔	13	玉鬘	4	御法	1
若紫	9	初音	3	幻	1
未摘花	9	胡蝶	1	匂宮	6
紅葉賀	3	蛩	1	紅梅	3
花宴	0	常夏	3	竹河	7
葵	4	篝火	0	橋姫	10
賢木	7	野分	3	椎本	5
花散里	0	行幸	1	総角	5
須磨	7	藤袴	0	早蕨	3
明石	2	真木柱	3	宿木	7
霽標	0	梅枝	6	東屋	12
蓬生	3	藤裏葉	0	浮舟	2
関屋	0	若菜上	13	蜻蛉	4
絵合	4	若菜下	6	手習	6
松風	2	柏木	2	夢浮橋	2

この表から、『源氏物語』54巻中51巻にわたって用例が見られることが分かる。これをグラフにすると図2のようになる。



1節で見たように、『源氏物語』には巻毎に大きな分量の差がある。関屋や篝火といった少量の巻では用例採取が見られないものがあるものの、後半の巻に至るまでまんべんなく採取されているということが指摘できる。図1のテキストの分量と照らし合

わせて考えれば、逆に帚木・夕顔・橘姫は分量に比して採取数が多いといった点が見られるが、それは『源氏物語』各巻の語彙特性や『雅言集覧』部立ての特徴を精査する必要がある。ここでは、傾向として後半の巻から積極的に採取している様子を重視したい。図2に3.3で見た初出例の情報を付加すると、図3のグラフを得る。



巻が進んで初出例が減るに従って、任意に選べる箇所では後半の巻からの採取が増えていく様子が見られる。このような統計的な結果を近世当時から考察していた読者は多くないであろうが、直感的なところで用例に登場する巻名の幅広さから『雅言集覧』が『源氏物語』を網羅していることは素人目にも分かりやすいものであったと考えられる。

もちろん、「任意に選び得る箇所では他にどのような選択肢があるのか」ということが問題になるが、『雅言集覧』とCHJとの本文の差や意義認定の差から、それを端的に導いていくのは難しい。選択肢が多い項目、すなわち「ばかり」のように『源氏物語』に多数現れるものになると（CHJでは語彙素「ばかり」の検索で908例を得る）、『雅言集覧』がどこまでを同様の対象としていたのか判断が難しいからである。しかし、統計的な処理とは別に、細かい文脈を判断していくということもまた今後の必須課題として浮かび上がるものである。

4. まとめ

「い」部では篝火巻からの用例採取は見られなかったが、「ろ」「は」部の調査によってそれも認められた。当該巻の分量の少なさから採取できる用例にも限りがある中で、『源氏物語』の中で唯一そこにしかない「はつかぜ」を抜き出しているのである。また、初出例として最も後ろの巻からの採取は、項目「はきて／はきたる／はかせ」の用例を擁する浮舟巻である。『雅言集覧』が、『源氏物語』に一つしか見られない用例を的確に見つけ出し、巻全体に目を配っていることを明確に表している。

本調査でも、改めて『雅言集覧』編纂者の用例探査能力の高さが分かる。『雅言集覧』の見出し項目の中には、現代の辞書では項目として立たないであろう特異な語形を見出しとして設定した例が多々見られる。例えば次のごとくである。

たえはてにたり	若紫に1例のみ見られる用例を掲出
はなやかならで	梅枝に1例のみ見られる用例を掲出
はらひあけさす	帚木に1例のみ見られる用例を掲出

現代的な言い方をすれば、『雅言集覧』は意味区分や活用、助動詞等への接続の多様さを見出し項目として示しているとも見られる。その上で、それらが膨大な『源氏物語』のその箇所には存在していないということを示している。『雅言集覧』の種々の見出し項目に付随した用例は、一見古典作品内に数ある用例の中の一つというようにも見えるが、『源氏物語』について言えば『源氏物語』に見られる語形を狙い撃ちしているものが多いのである。この用例選定の態度は、見出し項目の立項態度にも当然つながるものである。すなわち、掲げたものが全ての用例であるという自信があるからこそ、現代日本語辞書制作現場では立項の選択肢に入らないような活用形や複合辞について、(子見出しだとしても) 各々別に見出しとして立てるのである。石川雅望の『源氏物語』用例への自信は、『清石問答』における石川雅望の記述からも分かる。「きやうさく」「かうさく」という語について、「同語とおぼえたり」として『源氏物語』中の12例を挙げ、「以上源氏に見えしかぎりなりほかの物がたりぶみにも多し」と書かれる。有形であれ無形であれ、『源氏物語』についての強固なデータベースの存在を感じさせる。

そしてこのような編纂態度から、複数の活用や複合辞が子見出しとして立てられている場合には、「ここに挙げた形しかない」ということを示している蓋然性の高さが考えられ、少なくとも『源氏物語』についてはその見通しが立つ。この点は『雅言集覧』の依拠した本文も判明しているため別途精査したいが、『雅言集覧』が古語作文の実作として確実な証拠を示すものだという点につながる。古典語の意味や文法の研究が進んだ近世において、「意味・文法的には可能だと考えられる擬古文」と「実際に古典に出現する形」を峻別し、「理論上はあり得る組み合わせであっても実例では一切現れない」という情報を提供する編纂意図を仮定することができるのである。古典語のネイティブになり得ない鎌倉時代以来の葛藤は、近世国学研究が示す理論と実例の往還によって成り立つというテーゼの提示である。これは現代のコーパスが果たす一つの役割に繋がるとともに、字音仮名遣いにおける演繹と帰納の話にも繋がる点で極めて興味深い。もちろん、『雅言集覧』には『源氏物語』に限らず多様な典拠が存在するのであるから、『源氏物語』以外の用例はどのように扱われているのか、という点を考える必要がある。また、石川雅望の書いた擬古文の精査によってその当否を判断していくことも求められよう。後の課題にしたい。

明治以降、コーパスの整備が進まぬ時代に『雅言集覧』が一定の評価を得ていたが⁽⁷⁾、その妥当性は改めて認められるべきである。現代においても、文字列が一致しなければ引き難いデータベースがある一方で、古典を渉猟した先人の知恵の集大成から

用例にアクセスできるツールは、『雅言集覧』に限らず再評価される段階にある。

【注】

- (1) なお、拙稿（2019）で触れた親見出し／子見出しについて、データ上の区別はあるものの結果には関わらないため本稿では両者を区別しない。
- (2) 国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス』バージョン 2019. 11, <https://chunagon.ninjal.ac.jp>
- (3) 『源氏物語』のテキストデータについては、長瀬真理氏作成のものを使わせていただいた。各巻の分量については、長瀬氏のテキストデータから改行を削除したファイルのバイト数を比較している。表記や句読点の有無で差が出るため、あくまで概数の把握目的と理解されたい。
- (4) CHJ が見逃している用例を『雅言集覧』が挙げるということは無く、本文の異同に基づくものを除けば、単純な検索であれば『雅言集覧』の結果がCHJに包含されることは言うまでもない。
- (5) 底本が異なるため、文字列検索や語彙素検索等をかけ合わせて絞り込んでいったものである。
- (6) 『雅言集覧』の特徴の一つであるが、見出し項目「はてん」の用例に「はて侍らん」を含むものを挙げるなど、見出しの語形と用例に見られる語形とが必ずしも一致しないという問題がある。
- (7) 築島裕先生が『雅言集覧』を高く評価されていた旨、月本雅幸先生より教えていただいた。その真意の一端にでも迫ることができれば望外である。

【参考文献】

- 『清石問答』(国書刊行会(1906)『源注余滴』(国会図書館デジタルコレクション:<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/991251>) 所収)
- 平井吾門 (2019) 『『雅言集覧』の用例における『源氏物語』の扱い』(『立教大学大学院日本文学論叢』19)

【付記】

本研究は JSPS 科研費 JP17K13460 の助成を受けたものです。